

「武蔵国分寺 & 東山道武蔵路」歴史探訪

2023-05-17 記 小倉洋一

■実施日：2023-05-11(木)

■参加者：21名

■場所：武蔵国分寺跡周辺

■ガイド：国分寺市史跡ガイドボランティア

武蔵国分寺周辺の歴史散策は9年前の2014年10月「第2回鎌倉街道を歩く(恋ヶ窪～府中中河原)」以来2度目である。

今から約1300年前の奈良時代は、伝染病の流行、飢饉、大地震、政治の混乱によって社会不安が続き、人々は苦しみの中にあった。そこで、聖武天皇は仏教の力によって国の混乱を鎮めるため、天平13年(741)に国分寺建立の詔を發布した。当時の60余国に建立された国分寺の一つが武蔵国分寺である。

今回は国分寺史跡ガイドボランティアの案内により2班に分かれての探訪となった。

広大な武蔵国分寺跡ではすべての史跡や施設に説明看板があり歴史やいわれについて知ることができた。そして、おたかの道湧水園の武蔵国分寺跡資料館の展示物でも学ぶことができた。

◆行程

スタート：西国分寺駅⇒東山道武蔵路跡⇒土師竪穴住居跡⇒薬師堂⇒仁王門⇒おたかの道湧水園⇒武蔵国分寺資料館⇒お鷹の道⇒七重塔跡⇒金堂跡・講堂跡⇒史跡の駅(昼食)⇒伝鎌倉街道⇒西国分寺駅⇒解散

◆東山道武蔵路跡

東山道武蔵路は都と地方を結ぶ古代東山道の枝道の一つで、上野国から武蔵国府へと南下する幅約12mの直線道路である。泉町2丁目(西国分寺地区)では、幅15m、長さ400mの範囲で舗装した路面に、当時の道路幅と側溝の位置が表示されている。この古道については門内政広先生の「所沢の魅力再発見」(古道からみるいにしえの所沢)の講座において、所沢の南陵中学校の校庭から見つかった東山道武蔵路を「東の上遺跡」から学んだ。

律令時代の七道駅路は総延長約6300kmにわたって約400駅以上が整備された。令和元年の高速道路の総延長は約10,400kmであり、古代の道路網がいかに発達していたか推測される。



◆土師竪穴住居跡

昭和31年、初めて武蔵国分寺跡の本格的な発掘調査が行われた。この時、薬師堂の西側でも調査が行われ、僧寺の寺域を境とする北辺・西辺の両溝跡と寺域の内外の同時代の竪穴住居跡が四棟発見された。今ではこの住居跡は、埋められていて標識にて位置を知ることができる。

名称の「土師」は、当時一般に使用されていた土器の種類である土師器をさしており「土師器」を使用していた時代(古墳時代から平安時代)という意味である。



◆薬師堂・仁王門

武蔵国分寺は、国府とともに政治・文化の中心として栄えたが、元弘3年(1333)新田義貞による鎌倉攻めでの分倍河原の戦いで焼失した。

薬師堂は、建武2年(1335)に義貞の寄進により国分僧寺の金堂跡付近に建立されたと伝えられている。その後、宝暦年間(1751～1763)に現地で再建された。

仁王門は現在の薬師堂の階段下に建ち、左に「阿形」右に「吽形」の金剛力士像が安置されている。残念ながら太い格子で周りを囲まれていて全体像を見ることが難しい。尚、仁王門に使用されている木材の一部は、義貞が再興した薬師堂の古材を使用していると伝えられている。



◆おたかの道湧水園・武蔵国分寺資料館

・展示室1

資料館に入るとまず目に入るのが、調査結果をもとに作られた武蔵国分寺のジオラマである。武蔵国分寺の発掘調査の成果や出土資料。男瓦「寺」朱墨書、墨書土器「国寺」、幡の金銅製飾金具など

・展示室2

旧石器時代から江戸時代までの主な文化財を展示している。

硬玉製大珠(縄文時代)、銅造観世音菩薩立像(白鳳時代後期)、緑釉花文皿(平安時代)、徳川將軍家寺領安堵朱印状(江戸時代)など

- ・展示室3

史跡から出土した瓦

創建期の軒先瓦、鬼瓦、群名文字瓦、群名・人名文字瓦など

- ・武蔵国分寺七重塔推定復元模型

おたかの湧水園に堂々とそびえ立つ七重塔の復元模型は本来の塔の10分の1で、実際の塔は60~70mほどととても大きかったようである。当時の建築に携わった方々の高い技術力に感心した。



◆お鷹の道・真姿の池湧水

江戸時代に尾張徳川家の御鷹場と指定され、村人の生活に多くの影響を与えていた。国分寺崖線下の湧水を集めて野川にそそぐ清流沿いの小道はいつのころからか「お鷹の道」と呼ばれ、四季折々の散策路としての人気があり国分寺の名所となっている。

「真姿の池」は難病で苦しむ絶世の美女と言われた玉造小町が、池で身を清めよとの霊示を受けて快癒したことに由来する。

◆武蔵国分寺跡

武蔵国分寺の伽藍配置は、南門、中門、金堂、講堂が一直線に並び、塔が回廊外に置かれる東大寺式である。

- ・七重塔跡

七重塔跡は、金堂・講堂跡から東方200mのところに位置し、「金字金光明最勝王経」を安置する国分寺の重要な施設であった。3間(約10m)四方の礎石建物で、高さは約60mあったと推定される。現在、中央にほぞ穴(心柱を受ける穴)がある心礎を含め7個の礎石が残っている。

- ・金堂跡

金堂は本尊仏を安置する建物で、桁行き7間(約36m)×梁行き4間(約17m)の礎石建物として建てられた。現在も多くの礎石が残されている。武蔵国分寺の金堂は諸国国分寺中最大級の規模であった。

- ・講堂跡

講堂は經典の講義などが行われる建物で、桁行5間(約29m)×梁行き4間(約17m)の礎石建物として創建され、後に金堂と同規模の桁行き7間(約36m)×梁行き4間(約17m)に増設して再建されたことが明らかになっている。



◆昼食

昼食は周辺に食堂・レストランなどがなく、弁当持参でおたかの道湧水園の庭や史跡の駅のテーブル席で食した。野外で食べるお弁当も格別である。

午後の探訪に向かう途中、北西の空に黒い雲があらわれ、あっという間の夕立であった。尼寺の手前、武蔵野線のガード下で雨宿りするも、雨が止まず。途中、伝鎌倉街道を通り西国分寺駅に向かい解散となった。

◆伝鎌倉街道

鎌倉街道の名は、近世になって使われたもので、鎌倉時代は武蔵国内の主要道路は上の道、中の道、下の道と呼ばれていた。鎌倉以前の幹線道路である東山道武蔵路と道筋の重なる「上の道」が現在の鎌倉街道にあたり、鎌倉から町田、府中、国分寺、所沢などを経て上野、信濃方面にのびている。武蔵国分尼寺跡の北側にある国分寺崖線を切りとおした約120mの道が「鎌倉上道」のなごりといわれて保存されている。

※今日の武蔵国分寺史跡周辺ガイドのイヤホンマイクによる説明は聞き取りやすく、丁寧な説明は大変満足するものであった。

尚、午後の探訪は急な夕立で一部を残し解散となった。

参考資料

1. 史跡国分寺跡 100 周年のあゆみ 国分寺市教育委員会発行
2. 武蔵国分寺跡資料館解説シート
3. 各施設の説明版
4. 国分寺、所沢のホームページなどネット検索

【担当】Dグループ 清水、粕谷、青木、平野、小倉